・杉の又の神杉（姥杉）……昔、桧山台の奥地、北の俣の内、杉の又に大杉あり。里人呼んで神木となす。仙台の殿様これを伝え聞き、船の帆柱にせんと思いたち、数多の人足をさし向けてこれを伐り出さしめんとす。杉の生えたる箇所は峰をへだてて出羽、奥州の境に近し。

人足等、斧を振って杉の根元を切らんとするに、周り数尋に亘る大杉の切口より血流れ出て、あまつさえ昼間切りくずせるところの木端は夜悉く元に返りて附着し、数日を費やせども伐り倒すこと能わず。人足の一人いわく「木端は悉く焚くに如かず、然らば附着するとこなく容易に伐り倒し得べし」と。衆、皆手を打って同ず。斯くして数日の後、かろうじて此神木を伐り倒すことを得たり。よって大綱をもってこれを峰に引き上げんとし、数百人力をそろえて引けども、件の巨木微動だもせず。よって更に人数を増し辛じて一ト坂引き上げ、もう一息というところに至り、先ず一服と一同打ち喜びその場に休息して酒を呑み酔いて踊る。そこを「踊り場」という。しかもこの歓喜の最中に件の帆柱材はメリメリと大音響をたつると思う間もなく、地響きを打って反転し、あわやという間に多数の人足共はその下敷きとなり無惨な最期を遂げたりとなん。帆柱のことは神罰を恐れてそれきり沙汰止みとなり、この帆柱材はその踊り場に横たわりしまま、春風秋雨幾百年巨体は朽ち、葉積み土かぶさりて今も土手状をなしているとかや。その親杉のあとには、今も幾本かの曾孫杉が群がり生えているという。